

11月10日

主教教会博士レオ

Leo Magnus (Papa Leo I)

(400~461.11.10)

～ペトロの後継者 Papa～



レオ1世と
アッティラの
会見

(ラファエロ画 1514年)

トスカーナ出身のローマ教皇(在位 440 年～461 年)であり、グレゴリウス 1 世と共に大教皇と称せられる。大レオ(Leo Magnus)と呼ばれ、また使徒ペトロの後継者としてはじめて教皇(Papa)という称号が用いられる。

彼は前任者の時代に、フランスで内戦を起こしていた二人の領主を和解させるなど、政治面で活躍し、また教理論争でも頭角を現していた。そして教皇として選ばれることとなる。

レオは、ローマ司教の他の教会に対する神の代理人としての首位権(Principatus)を主張し、ローマ司教こそ使徒の最高権威者であるペトロの使徒職を受け継ぐ者であるとした。そして教皇としての地位と機能を確認していく。

また、マニ教などの異教や、ペラギウス主義、プリスキアヌス派、エウテュケス主義といった異端の排斥に努めた。当時、キリストは神であり人ではない、逆に人であり神ではないといった異端があったのだが、エフェソスの教会会議(449年)において単性論が承認される。そのことに反対したレオは、カルケドン公会議において、積極的に働きかけたという。

レオはカルケドン公会議で、「キリストは真の神であり、真の人間である」と述べる。その朗読を聞

いた司教たちは、「レオの口を借りて、ペトロが話した」と口々に言ったという。

彼が残した手紙には、単性論を批判したものやローマ司教の首位権を主張したものがあり、173の書簡が残されている。また、教会の祝日の問題に触れた説教などをあつめた説教96編を集めた説教集も残されており、現在においても教会史的に重要な価値を持つものである。

さらに、最古のミサ典礼書は、レオ秘跡書と呼ばれている。

なお、ラファエロが書いた壁画に出てくるアッティラとはフン族の王であり、ローマを攻撃しようとした彼を、十字架を持ち、祭服を着たレオが威厳をもって阻止したというものである。(Y)

<特禱>

全能の神よ、あなたは主のしもべ、主教教会博士レオの教えによって公会を照らして下さいました。どうか天の恵みをもって公会をますます豊かにし、忠実な証びとを起して下さい。その生活と教えに倣い、わたしたちがすべての人に救いの真理を宣べ伝えることができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン